

ひとが生き生きと学ぶ場をどう創るか？

—ゼミナール研究から生まれた学びコミュニティ『5つの問い』—



大学生

ゼミナール

学びコミュニティ

環境適応性

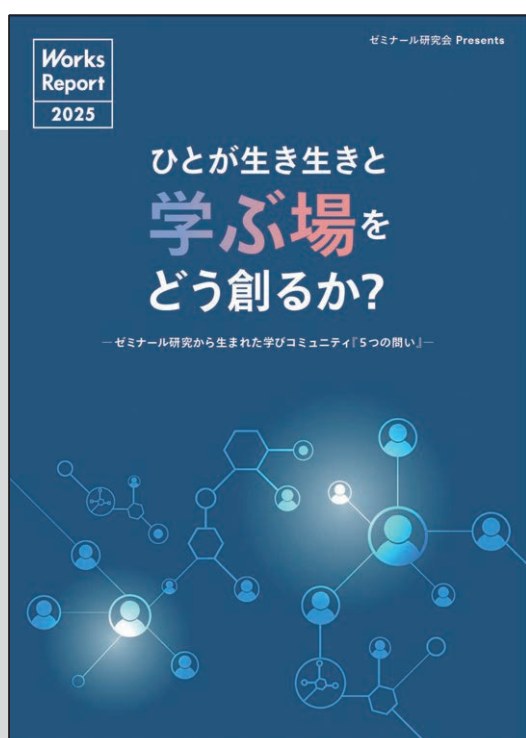
自己変容・自己発見

異質な他者との深い交流

プロジェクトリーダー

豊田 義博

特任研究員



概要

日本の大学の特徴的な存在である専門ゼミナールのあり方を探索し、深めていくために発足した実践コミュニティ「ゼミナール研究会」。ゼミが「学生を飛躍的に成長させる場」という確信を持った大学教員など多様な立場の人が集まり、様々な活動を展開。得られた知見をもとに、『5つの問い』を提示。事例をもとに教員視点、学生視点で検証し、社会人コミュニティなどへの応用可能性を論じた。

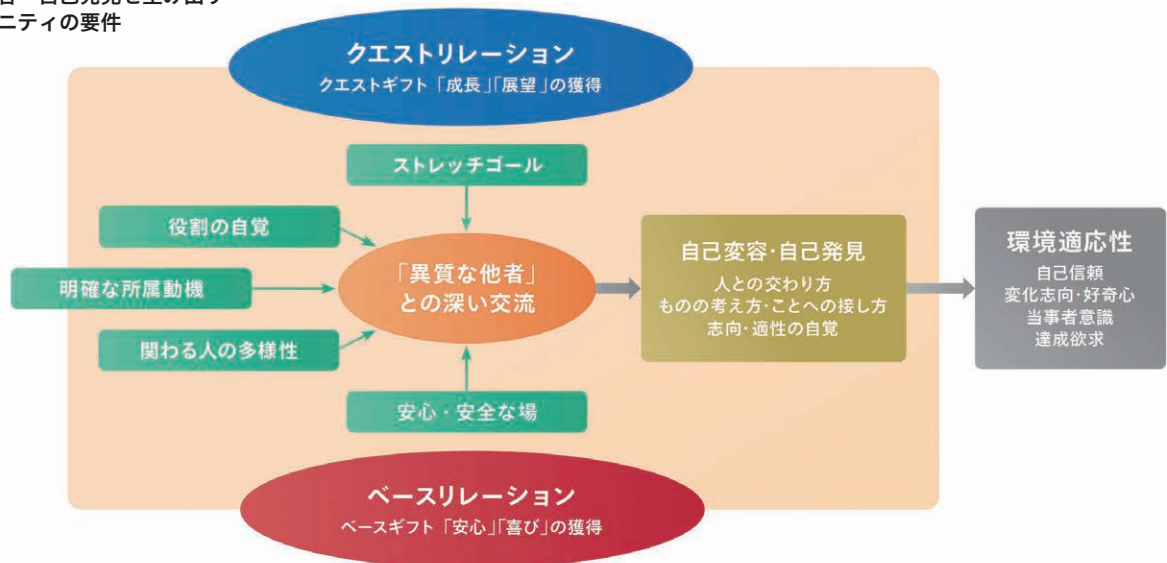
問題意識

社会の変容が加速度的に進む中で、大学生活の意味・価値の重要性が増している。職業能力のひとつであり、変化の時代にその重要性が増している環境適応性を、学生生活を通して獲得していくことが大きく期待されている。環境適応性は、人と人とのつながり、コミュニティでの経験や気づき・学びによってもたらされる。大学生である期間に、様々なコミュニティに参加し、様々なつながりを通して、生きてい

くうえで大切な態度である環境適応性を身につけていく。その機会を、ゼミという学びコミュニティを通して創造していくモデルを確立した。そのモデルは、全年代に適用できないだろうか。すべての年代の人が、変わり続け、学び続けることを求められる中で、学びコミュニティの応用可能性を検討したい。

結論

自己変容・自己発見を生み出す
コミュニティの要件



学びコミュニティ『5つの問い』

大卒社会人への定量調査、ディープインタビューを通して、異質な他者との深い交流を通じた自己変容・自己発見を生み出すコミュニティの要件を構造化した(図)。このモデルには、学びコミュニティ『5つの問い』が組み込まれている。

- 【問い1】主体的な所属動機が育まれているか？
- 【問い2】ストレッチゴールが設定されているか？
- 【問い3】それぞれの役割の発見や挑戦を生み出せているか？
- 【問い4】関わる人の多様性が創出されているか？
- 【問い5】「何でも話せる」安心・安全な場になっているか？

大学教員・学生記者による事例研究

このモデルをベースに、ゼミ、研究室、全学プログラムなど大学のカリキュラムとなっている学びコミュニティの事例研究として5つのケースを紹介。各教員の施策、重視する視点を『5つの問い』をベースに整理した。また、ゼミナール研究会が組織化した「学生記者」の活動も併せて紹介。学生記者たちが取

材、執筆、記事化したゼミでは『5つの問い』にどのように答えていたのかを検証。そして学生記者自身の大学生活においては、自己変容・自己発見を生み出すコミュニティは何だったのか、どのような異質な他者が登場したのかを回想した。

『5つの問い』の応用可能性

そのモデルは大学教育の現場に限定されるものではない。小・中・高の教育現場にも、社会人が中核的な対象である専門職大学院においても、企業内のOJTや長期にわたっての研修プログラムなどにおいても、さらには、学びを一義的な目的としない、成果追求型のコミュニティにも応用可能なものだ。そのような応用可能性を、教育学の研究者、民間企業のシニアマネジャー、社会人学習の専門家を交えて検討した。

Works Reportはこちら

ひとが生き生きと学ぶ場を
どう創るか？

<https://www.works-i.com/research/report/place2025.html>

